第４６回宮崎県高校総合文化祭　開幕

青春謳歌　～みんなでつなぐ青春という名のバトン～

宮崎県高文祭新聞

宮崎大宮高校
新聞部

第７７期
H・A
K・K
T・Y
K・Yz
G・Y
M・S
K・Yu
I・N

©OMIYA_PRESS

歴史を振り返る大会

「青春謳歌～みんなでつなぐ青春という名のバトン～」の大会テーマのもと開催される今年の宮崎県高総文祭は、「宮崎市制１００周年」という節目とも重なり、つないでいくバトンをみつめ、歴史を振り返る大会となった。文化部の歴史と高校生の歴史を大宮高校新聞部でたどってみた。

「嵐に向かって進め」

１９７９年（昭和54年）発足

第４回高文祭パレードの様子
一九八二（昭和五十七）年は演劇・音楽・美術・書道・吹奏楽の５部門のみ

今回で46回目を迎える宮崎県高校総合文化祭は、

初代高文連会長の思い

１９７９年（昭和54年）に始まった。第１回大会は吹奏楽、音楽、美術、書道、演劇の５部門のみで開催。現在は22部門にまで増えている。

宮崎県の高校文化連盟は全国の組織ができる７年前にはすでに結成され、先進的な取り組みとして他の県の指導的役割も果たしていた。発起人の一人である後藤賢三郎氏（初代高文連会長）は、「高体連はあるのになぜ今日まで高文連はないのか」との思いで高校生の文化活動の重要性にいち早く気付き組織化に取り組んだ。発足当時「私はこの船の乗組員に『安全な航海を祈る』ではなく、『嵐に向かって進め』と申し上げたい」と述べ、宮崎の高校生の文化活動の指針を示した。

平成22年に全国高文祭のマスコットキャラクターを公募し、５６７点の作品の中から選ばれた「ハニア」。平成23年に県高文連のマスコットキャラクターとなった。

口蹄疫発生を乗り越えて

全国大会を本県で開催

２０１０年（平成22年）開催

開催が危ぶまれたが、無事開催された２０１０年の全国高文祭のフィナーレの様子

２０１０年（平成22年）に本県で、第34回全国高等学校総合文化祭宮崎大会が開催された。大会開催からさかのぼること５ヶ月、宮崎県で家畜の伝染病である口蹄疫が発生した。口蹄疫は感染率が高く、感染した家畜には殺処分が求められる他、家畜や人の移動による感染拡大を阻止するため、移動制限がかかる。宮崎への往来を忌避する他県の風潮が強まる中、全国大会の宮崎での開催が危ぶまれた。しかし、関係各方面の理解と尽力により開催にこぎつけることができ、高校生の文化の力を本県に結集することができた。

Contents
宮崎高校文化連盟の歴史　１面
45回の高総文祭フォト　２・３面
宮崎の高校生の100年間　２・３面
特集：高文連シンボルマークの作者にインタビュー　４面

←1979年に作られた高文連シンボルマーク

高文連マークの考案者にインタビュー

宮崎の高校生の歴史をたどる作業の中で、４４年前に高文連のシンボルマークをデザインした高校生に着目した。その方はのちにデザイナーとなり、GReeeeNや「日本のひなた宮崎県」などのロゴマークをデザインした方、プロのアートディレクターである日髙英輝さんだとわかり、取材を申し込んだ。取材の中で、高文連マークに込めた思い、仕事への向き合い方、マーク作成のエピソードなど貴重な話を聞くことができた。

アートディレクター
日髙英輝氏
1962年宮崎生まれ。2001年東京でグリッツデザイン設立。
現在に至る。

緑豊かな宮崎の明るさと高校生の快活さを表現

１９７９年に高文連が立ち上がり、高文連のマーク募集が始まった。日髙さんが日向学院生だった時、美術の先生に勧められたことがきっかけで高文連のシンボルマークに応募したそうだ。応募総数２３０点の中から高文連のシンボルマークが決まった。今から44年前のことである。シンボルマークを作成するに当たり、緑豊かな宮崎の明るさ、高校生らしい快活さ、宮崎らしさを表したいと思ったそうだ。県の木であるフェニックスや高文連の「文」、緑豊かさを表すために緑色をポイントにするなどといったエ夫をこらしたとおっしゃっていた。また、シンボルマークを作成した当時、デジタルは発達しておらず、すべて手書きで書いたそうだ。（KYz）

1980年（昭和55年）。高校生のころに日髙さんがデザインした高文連のマーク

GReeeeNのロゴマーク、アートワークをてがける

日髙さんは大学を卒業後上京。２つのデザイン会社を渡り歩いたのちに独立し、現在のデザイン制作会社GritzDesignを立ち上げる。その中で、デビュー前のある覆面ボーカルグループのアートワークの仕事を依頼された。その時に制作したのが、このGReeeeNのロゴである。歯科医大に在籍する学生グループであり、応援メッセージをこめた曲が多いことから、歯を見せたスマイルのロゴを考案。１つの作品を生み出す過程で、クライアントと何度も打合せ、全ての情報をひきだし、たくさんの時間を重ねるそうだ。

大人になって再認識した宮崎の良さを表現

日髙さんの作品の一つに「日本のひなた宮崎県」のロゴマークがある。デザインするきっかけは、県からプロモーションに関する依頼をされたこと。初めはブランドスローガンを作成する依頼だったが、コンセプトを考えていく際にロゴマークを作ることが決まったそうだ。宮崎出身のコピーライターとディスカッションを重ね、依頼を受けてから完成までに1年かかったという。地域によって様々な気候や方言、県民性がある宮崎県に共通しているイメージを熟考した結果「ひなた」という言葉が浮かんだと話す。マークに込められた想いは宮崎の温暖な気候や自然、人の温かさで、温かみのある同心円状のデザインで表現されている。デザインした時に意識したことは、温かさを感じるマークにするために、あえて手描き風にこだわった。普段東京で仕事をしている日髙さんだが、故郷宮崎での仕事には力が入るそうだ。ニシタチや温暖な気候、食の豊かさ、のんびりとしている県民性など、大人になって宮崎の魅力を再確認した日髙さん。宮崎に積極的に関わって、デザイナーとして培った経験値を還元したいと話した。（G）

デザイナーの原点

「絵を描くことが好きで小学5年生くらいのときから表現する仕事に就きたいと思っていた」そう話してくださった。日髙さんは音楽や友だちの影響もあり、高校生のころにはデザイナーという職業を目指していたそうで、日向学院高等学校初の芸術学部進学を果たしたそうだ。（T）

事務所の名称の由来

大学時代に愛読した「「グリッツ」というハードボイルド小説から社名を考えたという。ローマ字のときの文字面の良さと、濁音や小さい音が含まれていて歯切れよい「グリッツ」という言葉は、語呂や言葉の響きがいいものを求めていた日髙さんの心にしっくり来た。辞書に載らない「gritz」というこの単語は、グラフィックデザインの道を目指していた日髙さんにとって「graphic design」と頭文字が同じ「G」になることも、この社名に決定した理由の1つだ。（M）

宮崎の高校生にメッセージ

高校生は若くて可能性に満ちている。遊びや勉強、部活動に全力で取り組んでほしい。デザイナーという職業は誰かを笑顔にできるやりがいのある仕事。絵が好きな人はデザイナーの道を歩んでほしい。（I）

高文祭フォトギャラリー
二十二本のバトンをつなぐ使命

第１４回大会演劇

第２１回大会将棋

第４０回記念大会

第１３回大会書道

第６回大会吹奏楽

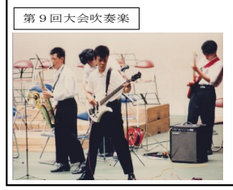
第９回大会吹奏楽

第１３回大会書道

第６回大会パレード

第１０回大会弁論

第２０回大会囲碁


第９回大会吹奏楽

第１３回大会美術

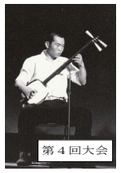
第１３回大会合唱

第１０回大会百人一首

全国高文祭

第９回大会百人一首

第２７回大会文芸


第４回大会

第２７回大会

第１４回大会放送

第１１回大会写真

宮崎の高校生、この百年
一九二四～二〇二四

男女別の高校教育
男子は旧制中学校　女子は高等女学校
1920・30年代

今から１００年前の高校では、男女が席を同じくすることができず、男子は旧制中学校、女子は高等女学校へと別々に入学。男性と女性が明確に分けられていた。女学生は、科学技術などよりも家事や裁縫に重きを置いたカリキュラムであった。女性は男性を支える役割を求められていた時代である。今男女ともに自由に、そして平等に進学し、勉強できているのは当たり前のことではない。（M）

旧制宮崎中学校と宮崎高等女学校（ともに１９３０年代）

戦時色濃くなりゆく時代
昭和天皇が旧制中学校を訪問
1935年（昭和10年）

戦争の影響は、教育の場まで広がった。軍事教練が重要な科目になり、制服がカーキ色に変更されたり、教育勅語が重視されたりと学校生活は戦時色が濃いものとなった。１９３５年（昭和15年）には、昭和天皇が旧制宮崎中学校を行幸した。戦時中、現大宮高校でも金属回収で正門の鉄扉が撤去されたり、学徒動員が行われ「平和の塔」の建設作業に学生が駆り出されたりした。戦争に青春が振り回された時代であった。（G）

旧制宮崎中学校を訪れた昭和天皇

旧制宮崎中学校で行われた屋外教練（１９４１年ごろ）

男女共学開始
大宮高校新聞部発足
1948年

大宮高校新聞部第一号
１９４８年７月発行

初代編集長渡辺綱纜氏に取材する大宮高校新聞部部員

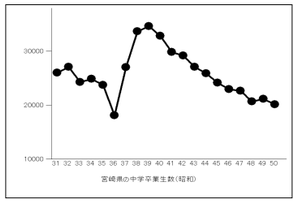
宮崎大宮高校新聞部は１９４８年に活動を始め、同年に第一号を発刊した。戦後民主主義化が謳われる中で、生徒自らが作る新聞は大いに注目を集めた。当時は新聞社に印刷を依頼し、生徒に有料で販売した。県内企業の広告を掲載し、ときには他県にまで取材に赴くこともあったという。第77期を迎える今日まで、新聞部員らは校内にとどまらず社会のあらゆる事象について疑問提起し、発信してきた。現在活動する八名の部員皆で、今後とも大宮高校の歴史を刻んでいく。（KK）

世界恐慌と バブル経済
1930年代 と 1980年代　県庁 と オーシャンドーム

重厚な雰囲気が感じられる宮崎県庁は、県庁舎としては全国では４番目、九州では最古を誇る。１９２９年から始まった世界恐慌は宮崎県にも不況をもたらし、失業対策として１９３２年に建設された。（KYu）

１９８６年に始まったバブル経済により資産価値が上昇。日本は好景気を迎えた。バブル経済の真っ只中に計画され、バブル崩壊後の１９９３年に開業されたオーシャンドームは、赤字が続き、２００７年に閉鎖され、２０１７年に解体された。（T）

ベビーブーム世代が高校入学
1960年代



このグラフは宮崎県の中学校卒業者数の変化を示している。グラフを見ると、昭和37年から昭和40年にかけて卒業生が増加している。原因として昭和22年から昭和24年に発生した第一次ベビーブームが挙げられる。この期間に生まれた人たちが成長し、ピーク時には約３５０００人が中学を卒業した。（I）

コロナ禍を経験
2020年～

２０２０年から流行し始めた新型コロナウイルスは、学生にも大いに影響を与えた。マスク生活を余儀なくされ学校行事や部活動の大会がなくなるなどの学校生活にも縛りが設けられた。緊急事態宣言などの影響により休校や緊急物資の運送、マスク不足やトイレットペーパーの買い占めなど社会現象も起きるなど、悪い影響を多くもたらした。しかし、オンライン授業の普及により、テレワークの普及が一層進むなどの良い影響も与えた。（KYz）

マスク着用・リモート交流などの感染対策がとられたうえで開催された2021年の高総文祭の様子